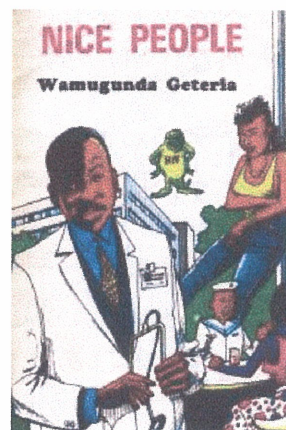


3章 『最後の疫病』と『ナイス・ピープル』

1. 『最後の疫病』

ケニアの二つの小説、メジャー・ムアンギの『最後の疫病』とワムグンダ・ゲテリアの『ナイス・ピープル』は、そんな「死にゆく大陸」でエイズにやられて苦しむ農民や労働者の話を見事に描いています。

著者のメジャー・ムアンギは、グギ・ワ・ジオンゴやチヌア・アチェベほどの国際的な評価は受けていないものの、厳しい抑圧の時期も国内で作品を書き続けてきた中堅の作家で、ケニアの経済的な危機とエイズの差し迫った状況を誰よりも感じているはずです。



エイズ患者が社会問題となってから十年ほどでウィルス増幅のメカニズムが解明され、治療薬が開発されたあと、作家に咀嚼されて本格的なエイズの小説が出るのはそれから数年後だろうと考えていた矢先に、『最後の疫病』が出版されました。コンドームを配って感染の予防の手助けをする未亡人とその女性を助ける獣医師の青年と村の人たちとの諍いをめぐる話ですが、「割礼」をめぐるグギが『川をはさみて』で描いた西洋的な価値観とアフリカ的な価値観の衝突が大きな主題の一つになっています。国の経済を支える農民や労働者の話で、抑圧体制の極めて厳しい国内に踏みとどまった作家にしか書けない世界でもあります。

（「エイズ」を正面から取り上げている作品はまだ多くありませんが、この『最後の疫病』を軸に、英語によるアフリカ文学が「エイズ」をどう描いているのかを分析し、病気の爆発的な蔓延を防げない原因や、西洋的な価値観とアフリカ的な見方の軋轢などを明らかに出来れば、また、英語の授業でエイズの問題を取り上げ、エイズの小説を読む立場から見える何かが見つかるかもしれないと考えて、「英語によるアフリカ文学が映し出すエイズ問題—文学と医学の狭間に見える人間のさが」の表題で2003年度の科学研究費補助金を申請したのです。）

主人公のジャネットは、子供3人と母親と暮らしている女性です。夫ブローカーが他の女性と家を出たあと、自殺を試みますが死に切れず、子供と母親を抱えて強く生きざるを得ませんでした。ケニアの田舎の村での女性の自立は極めて難しく、生計のために政府のエイズプロジェクトの仕事を選びます。エイズ対策のために政府が無償でコンドームや避妊薬などを配布する仕事でした。ジャネットの毎日が次のように描かれています。

ジャネットは毎日、自分の村クロス・ローズの丘を何十キロも自転車で越えて、歩き回りました。毎日、たくさんの人に説いてわかりました。コンドームはとても大事なのよ、家族計画のためにも必ず要るし、性感染症からみんなをちゃんと守つ

てくれるのよ、と自信を持って話しました。なるほどとジャネットの話に耳を傾ける人もいるにはいましたが、大抵は話を聞きたがらず、訪問先で煙たがられる場合の方が多かったのです。ジャネットが来るのを見つけるとそそくさと家に逃げ込む人もいましたが、ジャネットは逃げた人を捕まえて、相手の敵意もお構いなしに、すべきことをし、言うべきことを言いました。それが自分の仕事で、それもとても大切な仕事だったからです。ジャネットは自分を信じて疑いませんでした。

エイズにやられて今まさに死にかけのケニアの小さな村クロス・ローズが本文には次のように描かれています。

見渡す限り、至る所に墓土が盛られていました。かさばって陰気な固まりで、暗くて死のの臭いが漂っています。人の無益の忌まわしい残り滓の墓土を一つも盛らなかった家はありませんでした。そして、今日は墓土が一つ、明日は二つになりそうです。二つが四つ、四つが八つになりました。墓土は増え続けて、突然変異を起こし、遂に怪物になってしまいました。人の生活に墓碑銘を刻み続ける飢えた野獣となったのです。

ジャネットのかつての級友フランクが村に戻って来たとき、生まれ育った村の余りの荒廃ぶりと変わりように驚きました。フランクは村から多大の寄付を受けて大学にいくために村を離れていましたが、大学を卒業出来ずに村に戻ってきていたのです。期待を背に村を送り出されていながら夢も果たせずに村に戻るのもはばかりでしたが、HIVの検査で自らが陽性であることを知り、やむなく帰郷する決意をして戻って来たのです。次のくだりは、その時フランクが目にした村の様子です。

旧の高速道路を横切って村に入りながら、フランクはクロス・ローズもすっかり変わり果ててしまったなあと感じていました。子供の頃には楽しかった町もすっかりくたびれて、荒廃していました。家の壁や屋根は崩れ落ち、おびただしい数の廃屋から出るごみの山が通りの両脇に積まれていました。壊れた石造建築の山、崩壊する夢の山また山。クロス・ローズはすっかり意気消沈していました。病気にこっぴどくやられ、回復の見込みもなく絶望の淵にあり、まさに苦痛に苛まれるもの、その苦境に対しえほとんど抵抗すらも出来ずに、鳴き声すら出せずに死にかけている、そんな生き物のようでした。

ジャネットを捨てて村を出て行った夫のブローカーも村に戻って来ます。一山あてて金持ちにはなったものの、HIVに感染し、死に場所を求めて生まれ故郷に戻ってきたのです。ブローカーはかつてモンバサに引っ越しに行った女性ジェミナの家を訪れ、ジェミナがすでにエイズで斃れ、たくさんの子供と祖母だけが取り残されているのを知りました。ジェミナの家の荒廃ぶりが、次のように描かれています。

ブローカーはすっかり当惑した面持ちでジェミナの墓を後にしました。墓を案内してた少年がブローカーの両手を引いて他の少年たちのいる小屋に戻りました。小屋の二つの戸は開いたままになっていました。ブローカーは戸を押しやって暗がりを見込みました。薄汚れた室内は小便と貧乏の臭いが立ちこめていました。鼠が何匹も屋根裏にこしらえた巣に戻るために我先に壁をよじ登っていました。部屋には家具らしい家具も見あたりません。床じゅうに麻布やら敷きマットやらが広げられていました。二つ目の小屋も同じように惨めな様子でした。寝床は一日中、鼠の天下ででした。小屋から飛び出して来た瘦せこけて、ねじれた角をした乳山羊にブローカーは死ぬかと思うほど仰天しましたが、山羊はそのまま駆けていきました。

HIVに感染したと思いきこむフランクとブローカーは、死に場所を故郷に定めて帰って来ていました。幼馴染みのフランクは元々ジャネットに好意を寄せていましたし、ブローカーもジャネットへの未練は捨てきれないでいました。二人がジャネットの仕事を手伝うようになったのも自然の流れでした。

ジャネットは二人の助けを借りて懸命に働きますが、先ずは村人に染みついて離れないタブーや古い考え方と戦わなければなりません。タブーと旧弊について述べたくだけです。

意味ある発展をするためには、タブーと旧弊は消え去るべきで、排除しなければなりません。エイズ撲滅の戦いには、凝り固まった信念と思いきこみが一番の障害でした。実際には、その人たちには複数の妻、いわゆる安全な連れ合いがいて、売春婦と付き合ったりはしなかったからです。しかし、そお人たちの安全な連れ合いにはまた安全な連れ合いがいて、その連れ合いにはまた安全な連れ合いがいる、そんな安全の環が永遠に繋がっていて、実際にはその安全な繋がりが空恐ろしい大惨事を招いているのです。

偏見や旧弊との戦いは外だけではありませんでいた。ジャネットは、毎日毎日、家でも祖母の凝り固まった偏見と思いきこみに苛まれます。結婚をしないで自立をめざすジャネットが祖母には論外で、誰か経済的に援助してくれる男性の何番目かの夫人になるべきだと主張して譲りません。そんな祖母が執拗に、容赦なくジャネットを責め立てます。

「自分のことを考えてみなよ。自分の旦那もいないじゃないか。どうするつもりなんだい？」と祖母が言いました。

ジャネットは自分に生き方についてのこんな言葉をほとんど毎日聞かされました。言葉に傷つき、怒りのあまり泣き叫びたくなりました。しかし、自分が再婚するか祖母が死ぬまで、同じことを聞かされることになるのは目に見えていました。

「あんたは結婚しないとね。あんたと子供たちが心配なんだよ。」と祖母はジャ

ネットに言いました。

「もう一回結婚するの？」とジャネットは祖母に聞きました。

「ブローカーは間違いだったのさ。あんたにや違う人と結婚する権利があるんさ。あんたと子供たちをちゃんとみってくれるちゃんとした男とね。ほんとの男とだよ。」と祖母が言いました。

「ほんとの男？このクロス・ローツで？」とジャネットは祖母を小馬鹿にしたように言いました。

ジャネットは二人が今またあの会話の方に流れているのがわかりました。堂々巡りの忌まわしい結論、二人が既に何度も何度も繰り返した末に辿り着いた結論。

ジャネットは沈んだ様子で薄ら笑いを浮かべました。このクロス・ローツには自分自身の面倒をみて、妻や子供を思いやれる男が充分にはいないのを改めて思いかえしました。

目下の最大の問題は、妹の夫カタがエイズで志望した弟の妻と結婚しようとして譲らないことでした。カタはウィッチ・ドクターと呼ばれ、占いしたり薬草を煎じたりしている金持ちです。弟の妻が亡くなれば兄が妻を引き受ける伝統的な習慣を信じて疑いません。しかし、エイズでなくなった弟妻を夫人に加えれば、ジャネットの妹ジュリアも無縁でいられるはずありません。ジャネットは、カタを説得するようにジュリアに言って聞かせます。

「カタに何かを辞めさせるなんて出来ないことくらい知ってるでしょ。あの人がかどれくらい伝統を大事にして生きてるかも知ってるでしょ。」とジュリアはジャネットに向かっていました。

「あんた、何もわからないの？カタかサイモンの奥さんを引き取れば、あんただって確実に死ぬんだからね。」とジャネットは諦めきった様子で言いました。

「あんたに死ぬ時期がわかるんかい？」と祖母が愕然として言いました。

「姉さんには、何でもわかるわけ？私にああしろ、こうしろと、もううんざりだわ」とジュリアが開き直って言いました。

「あんたが心配なのよ」とジャネットはジュリアに言いました。

「心配しないでよ。あんた、わたしの母親じゃないでしょ。」とジュリアは不機嫌そうに立ち上がりました。

「あんたの姉よ。心配をして当然じゃないんお。」とジャネットはジュリアに言いました。

「モニカは私には姉妹以上よ。みんな男たちを頼りにしてるわ。わたしたち、売春婦じゃないわ。」とジュリアが言い返しました。

ジャネットの懸命の説得にも応じず、カタは弟の元妻モニカと結婚してしまいます。ジャネットは子供に希望を託して、学校を回って性教育をしようとしませんが教師たちの反応はよくありません。教会を訪れて会衆にコンドームの必要性を説き、使い方

を説明しますが、こちらも反応がよくありません。また、ウィッチ・ドクターを訪ねて、割礼の儀式での血液感染の危険性を説きますが、逆鱗に触れ、協力してくれるフランクの動物診療所が壊されてしまいます。

もの語りは、ある日政府から派遣されたオスロからの視察団にジャネットが、学校や教会やブローカーの開いたコンドーム販売所などを案内して評価を得、財団の援助を受けて村をあげての HIV 検査を実施するという皮肉な結末で終わります。

物語は、性感染症の怖さを教えてくれます。HIV の感染原因は解明されているわけですから、理論的には予防できるはずですが、実際には感染の拡大はとまりません。

ケニアでも他のアフリカ諸国のように、経済搾取の対象は常に農民と労働者です。ヨーロッパの入植者は、アフリカ人から武力で土地を奪って課税しました。多くのアフリカ人は税金を払うための現金を求めて村を離れ、出稼ぎに出ることを余儀なくされました。多くの場合、白人の大農園で紅茶を摘んだり、白人家庭の召使いをしたりせざるを得ませんでした。

ヨーロッパ人による搾取機構の中に組み入れられたアフリカ社会は変容せざるを得ませんでした。かつては自給自足のために積み上げられた制度も、変容によって形骸化してゆきます。一夫多妻制にしても割礼にしても、乳児死亡率の高い現実に対処して労働力を確保する有効な手段だったはずですが、しかし、形骸化した伝統は、弊害をもたらします。

ジャネットがたたかわなければならなかったのは、そういった形骸化された伝統やタブーだったのです。

二度の大戦で総力が低下した旧植民地支配国に対して、アフリカ諸国は独立の戦いは繰り広げられますが、しっかりとした経済基盤を持たないアフリカ諸国は、形だけの独立は果たすものの、結局は新しい機構植民地支配の下に組み入れられます。炎上や開発の名目で投資をして利潤を得るという仕組みです。ケニアも英国、米国、日本などの投資の対象となり、政権はその仲介者の役割を演じているわけです。独立闘争で自由のために戦った農民や労働者は、形だけの自由を手に入れても、結局は基本構造は変わらないまま、昔と同じような貧乏な生活を強いられることになったのです。そして、エイズ禍です。『最後の疫病』には、そういった農民や労働者がエイズにやられて、今まさに朽ち果てようとする様子が描かれています。

2. グギ・ワ・ジオンゴ

その農民と労働者のために書き続けるケニアの作家がいます。グギ・ワ・ジオンゴです。

グギは隣国ウガンダのマケレレ大学を出て、英国、米国で学んだ経験を持つ知識人です。南アフリカのソブクエやマンデラ、ジンバブエのムガベなどがフォート・ヘア大学で受けたように、植民地体制が「原住民のために設立した」大学で西洋流の教育を受けました。ジェイムズ・グギの名で書いた小説『夜が明けるまで』(1964) や『一粒の麦』(1967 年) などで国際的な評価を受け、様々な会議に招待されていました。

日本にも招待されています。

72年には、ギクユの名前グギ・ワ・ジオンゴに改名し、翌年には、アジア・アフリカ作家会議からロータス賞を受けています。しかし、そういった国際的名声も、「原論の自由を保障する民主国家」ケニアを宣伝する材料とはなっても、体制の脅威となるには至りませんでした。体制側の脅威となったのは、英語ではなく母国語のギクユ語で書いた脚本を、ギクユの農民と労働者が見事に演じきってしまった、つまり、多数派である搾取される側の農民と労働者が、演劇活動を通してグギさんの作品を理解し、自らの隷属的な立場に気づき、団結して体制側に挑み始めたからです。その時からグギさんは反体制側の象徴となりました。

『拘禁されて』は副題が示すとおり「一作家の獄中記」で、1977年の大晦日に逮捕されてからほぼ1年の間、国家最高治安刑務所に拘禁された顛末が仔細に綴られており、自らの体験や思いを誌した「獄中の記」に、「獄中からの書簡」と政府やナイロビ大学当局の公文書などを含む「拘禁の名残り」が添えられています。闘いは、奪う側のケニア政府と、奪われる側、国民の大半を占める農民・労働者との間の階級闘争でした。

もとより、侵略とは他人（ひと）のものを掠め取ることに他なりません。16世紀初頭にダルメイダ一行が東アフリカのキルワで行なったようなその場限りの虐殺・掠奪行為は効率的ではありません。一般に侵略者は、一時の利益よりもむしろ、出来る限り長く搾取する構造を打ち立てることに思いをめぐらせるものです。

ケニアのように古くから文明の発達した地域では、その社会機構を利用出来ないかを考えます。すべてを敵にまわして闘うのは、犠牲が大きすぎますから、相手の分断を試みます。言葉巧みに相手に近づいて、支配層の一部を味方にする、つまりケニア人の支配層の一部と手を組んで利用するわけです。

アメリカのテレビ映画「ルーツ」を見た人の中には、奴隷狩りで直接アフリカ人を捕まえていたのがアフリカ人自身だったのを見て、驚いた人もいるでしょう。大半の奴隷は同じアフリカ人に売り飛ばされていたわけで、首長と呼ばれる支配者層の中には、奴隷一人をジン一本と交換した者もいたと言われます。その人たちは、自らの欲望と引き換えに同胞を西洋人に売り渡したのです。その構図は、英国主導の植民地支配でも、外国資本と組んだケニア政府による新植民地支配でも、基本的には渝ってはいません。

『拘禁されて』には、ケニアの侵略の歴史や構図と、グギさん自身の思いがぎっしりと詰まっています。

西アフリカでの奴隷貿易で蓄積した資本によって産業革命を起こし、生産手段を手から機械へと大幅に変えて消費しきれないほどの工業製品をつくり出した西欧社会は、市場を求めて、アフリカでの植民地争奪戦を繰り広げました。それは同時に、原材料と工場労働者の安価な食料を確保するための戦いでもありました。アフリカ大陸で侵略者は、アフリカ人から土地を奪って課税した。無産者となったアフリカ人は現金収入を得るために、賃金労働者にならざるを得、ませんでした。ケニアの場合、安価な賃金労働者として奴隷並みに、主として、工場で働くか、農園で紅茶を摘むか、

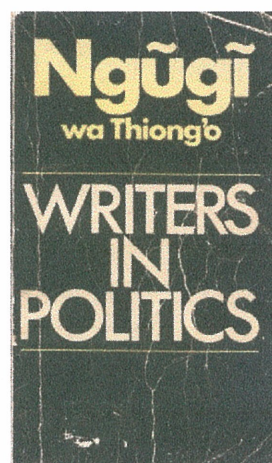
白人の家で召し使いをするかしかなかったのです。グギさんの祖先は肥沃な土地で豊かな暮らしをしていましたが、その土地も英国人入植者に奪われました。1906年には、肥沃な土地は白人専用の農地に指定され、ケニア人は痩せた狭い土地に押しやられます。侵略を正当化するために、キリスト教を含めた西洋流の文化と英語が強要されます。「植民地文化の傲慢さよ！」とグギさんは書いています。

植民地文化の傲慢さよ！その盲目的で自惚れに満ちた野望には限度がない。

抑圧される側の抑圧する側への服従、搾取される側と搾取する側の平和と調和、ご主人さまを敬愛し、ご主人さまが末永く私どもをお治め下さいますようにと神に祈るべき下僕、これらは、警官の靴と警棒と軍隊の銃剣と、選ばれた少数派の目の前にぶら下げられた個人的な天国という人參によって、入念に躡けられた植民地文化の審美的な究極の目標だった……。

「掠奪、強奪、殺人。それがイギリス流のやり方」で、ケニア人の歴史は侵略者との闘いの歴史でもありました。侵略者と果敢に闘って散っていった数々の英雄の歴史をグギさんが辿ってゆきます。ワイヤキは1892年に初めて人質として拘禁された英雄で、護送中に撃たれて、生き埋めにされました。

初代大統領ジョモ・ケニヤッタも祖国のために闘った英雄の一人です。しかし、その英雄にグギが投獄され、拘禁されたのは、独立してからの数年間で、ケニヤッタが変節を遂げたからです。グギはその変節の背景が、ケニヤッタの率いたケニア・アフリカ人民族同盟（KANU, Kenya African National Union）の変容にあったと分析しています。KANUは様々な階級からなる大衆運動で、主導権は、帝国主義と手を携える将来像を描く上流の小市民階級と、国民的資本主義を夢見る中流の小市民階級と、ある種の社会主義をめざす下流の小市民階級との3派にありましたが、1964年にケニア・アフリカ人民民主同盟（KADU, Kenya African Democratic Union）がKANUに加わったことで、上流の小市民階級の力が圧倒的に増したというわけです。外国資本を後ろ盾に、数の力で、ケニヤッタは誰憚ることなく、自分たちの思い描いた将来像を実行に移し始めました。新植民地支配の始まりです。グギの逮捕は、その延長上にあったわけです。外国資本の番犬となったケニア政府は、植民地支配の国家機構をそっくりそのまま受け継ぎます。政治や経済はもちろん、文化や言語にまでその新植民地支配は及びます。ケニア文化の状況をグギは『作家、その政治とのかかわり』（1981）の中で次のように指摘しています。



今日、ケニアの生活の中心的事実は外国の利益を代表する文化の力と、愛国的国民の利益を代表する力の間での猛烈な闘争です。その文化的な闘いは日頃から見えない人には必ずしもはっきりとは見えないかも知れませんが、そんな人も、ケニアの生活が外国人と外国の帝国主義的文化の利益に実質的に支配されているのを

知ったらきつとびっくりすると思います。

そういう人たちがもし映画を見たいとしたら、外国人所有の映画館（たとえば、トゥエンティ・センチュリイズ・フォックス）に行って、アメリカ配給の映画をみることになるでしょう……。

同じ人が今度は日刊新聞を買い求めたいと思えば、パリのアガ・カーン所有のネイション紙かロンドンのタイニー・ローランド社のロンロ所有のスタンダード紙かのどちらかしかありません……。

さて、今度は学校を訪れるとしましょう。ケニア人の子供の生活は、小学校から大学までとそれ以降も、英語が支配的です。スワヒリ語とすべてケニアの国語が必修ではないというばかりではなく、フランス語とドイツ語ともうひとつの中から一つを選択するという選択肢の一つの言葉というに過ぎないのです。ケニアを構成する民族の言葉を完全に蔑ろにしています。このように、ケニアの子供はこういった外国語、つまり西ヨーロッパ支配階級の文化が伝える文化をすばらしいと思いながら育ち、自分自身の民族の言葉、つまり国民文化に根ざしたケニア農民が伝える文化を見下します。言葉をかえて言えば、学校は子供たちが国民的で、ケニア的なものを蔑み、たとえそれが反ケニア的であっても、外国的なものをすばらしいと思うように育てるのです……。

なかでも、外国文化の利益に支配されているのがもっともあからさまなのが劇場です……。

私たち自身の国の演劇の分野で、最も国を愛するケニア人が本当に悩んでいるのは、今まで述べたような外国人の存在というよりは、むしろケニア政府の財産ケニア文化センターとケニア国立劇場が、外国の演劇をケニア人に提供する外国人によって管理されているという事実なのです。外国人帝国主義者の使節団であるイギリス文化協会が事実上ケニア文化センターのすべての事務所を占有しています。同センターの管理委員会の委員長はイギリス人ですし、加えて、イギリス文化協会が評議会の代表者です。管理委員会によって経営されるケニア国立劇場は、シティ・プレイヤーズなどの外国人主体の演劇団体が完全に優勢を占めています。おそらく、「王様と私」や「ロビンソン・クルーソー」のような人種差別的な劇を提供する時以外は、こういった劇団の提供するものはケニア人の生活とは何の関係もありません……ケニア国立劇場のこういった劇団は、たいてい、ケニアにはケニアの監督も、ケニアの衣装も、ケニアの俳優も、ケニアの楽器もないかのような印象を与えるために、監督や衣装、オーケストラの楽器や俳優をイギリスやカナダから呼び寄せたり、取り寄せたりすることがよくあります。演劇評論家（これまた外国人）はといえば、批評で使う言葉は「それは普遍的ですか」「それは弾圧の話ではありませんか」「それはウエスト・エンドまたはブロードウェイ風ですか」の三種類の言い回ししか知りません……。（「第3章ケニア文化、生存のための国民的闘争」から抜粋）

そんな文化状況の中で、グギさんがグギ・ワ・メリーエさんと一緒にギクユ語で書いた劇『ガアヒカ・デング』（『結婚？私の勝手よ！』、1981年）が上演されたのであ

る。その上演の持つ意味をグギさんが次のように述懐します。

リムルのカーメレーゾ村教育文化センターのように村を拠点にした劇団が出現したのは歴史的に重要です。1977年にこの劇団は、グギ・ワ・ジオンゴとグギ・ワ・メリーエ共作による、ケニアの言葉の一つで書かれた最初の重要な現代劇『ガーヒカ・デンダ』を上演しました。役者はすべてカーメレーゾ村出身の農民と労働者で、みんなで考えて村の中央に野外舞台を作り、演出でも脚本の書き替えでも協力を惜しみませんでした。その過程で、今まで受容し続けてきた演劇の伝統と訣別を果たしたのです。例えば、脚本の第一回目の読み合せや討論は野外でしましたし、役者の選出も、選出を手伝ってくれる村の観衆と一緒に野外で行なわれました。四ヵ月間のリハーサルもすべて、ますます数の増えて行く批評家や演出家とともに野外でなされたのです。衣装合わせのリハーサルも千人以上の農民と労働者の前で行なわれました。ついに劇が有料で開演されたとき、劇を見るために貸切バスを仕立てたり、徒歩で足を運んだりした何千という農民と労働者の前で劇団は公演しました。初めて、田舎の人たちは肯定的に描かれた自分たち自身と、自分たちの生活と、自分たちの歴史を観ることが出来たのです。独立後の歴史のなかで初めて、それまで自分たちの運命であった法廷か教会かという残酷な選択から解放されたのです。そして少なからず、恵み多き外国人から洗練された文化を享受するだけの文化水準の低い受け手としか農民を見做さない人種偏見に満ちた見方を完全に打ち砕きました。

『ガアヒカ・デンダ』

「何千という農民と労働者」は『ガアヒカ・デンダ』の中で、どんな「肯定的に描かれた自分たち自身と、自分たちの生活と、自分たちの歴史を観ることが出来たの」でしょうか。

『ガアヒカ・デンダ』は農民のキグーンダと、実業家キオイをめぐる三幕六場の劇で、貧しいキグーンダが、金持ちのキオイに騙されて僅かな土地を巻き上げられるという体験を通して、社会の仕組みと自分たちの置かれた現実を自覚し始めるという筋立てです。

第一幕、キグーンダの家。土作りの一部屋の小屋、片隈に夫婦のベッドが置かれ、床に娘ガソニの粗末な寝具が敷かれています。壁には夫婦の継ぎ接ぎだらけの外套と、180坪余りの土地の権利書がかかっています。先祖の肥沃な土地は取り上げられ、イギリス人の手下だった少数のアフリカ人の手中にあり、あてがわれた180百坪余りは痩せこけた土地です。キグーンダはキオイの農園で雇われる身で、貧乏が染みついた我が身と、我が妻を嘆きます。キオイ夫妻が来るという手紙を受け取った二人は、落ち着きません。用件が、キオイが殺虫剤工場建設のために進める土地買収の話なのか、キオイの息子ムフーンニから一人娘への結婚の申し込みなのかを図りかねているか

らです。

キオイ訪問を嗅ぎつけた隣人ギカーンバ夫妻が、金持ちには騙されるなど忠告にやってくる。ギカーンバも安給料で働く、工員である。工場が環境を汚し、利益の大半はヨーロッパとアメリカと日本と、一握りのケニア人に流れ、学校など社会のすべてが金持ちの手中にあると嘆く。

やがてキオイ夫妻が友人を連れてやってくる。その友人は独立前は白人に雇われてアフリカ人を多数殺したが、悔い改めて洗礼を受け、今では豊かな暮らしをしているので、あなたも罪を悔い改めて、教会で結婚式をして、神に祈りなさいと、キオイと声をそろえていう。キグーンダは、家のことには干渉するなどキオイたちを追い返す。

入れ代わりに娘のガソニが着飾って戻ってくる。外には、車のエンジンの音。高価な靴や鞆を買ってくれたキオイの息子ムフーンニと一緒にモンバサまで一週間の旅行に行くのだという。両親は押し留めようとするが、振り払って、ガソニは出かけてゆく。

第二幕一場、別の日、キグーンダの家の中。キオイたちに騙されるなどキグーンダ夫妻を諭すギカーンバ夫妻。

1985年にイギリス人たちがやってきたとき、宣教師たちは左手に聖書、右手に銃を携えていた。宗教の甘い雰囲気にならなせながら、しばらくして、肥沃な土地を奪い、工場を建て、商売をやり始めた。独立のために闘った時も、強制収容所に来て神に身を委ねなさいと説いたのは聖職者たちだったのを覚えてないのか、とギカーンバが説く。自分たちの土地なのに、今や道路脇の狭い土地に追い遣られて乞食のような暮らしを強いられる毎日の生活を嘆く。

俺は日なが機械をまわし続け、
あんたは一日じゅう茶の葉を摘む、
妻たちは朝から晩まで畑仕事、
それでも、おまえらは懸命に働いていないという奴がいるって？
実際は、
俺たちの大地が育む豊かな富を、
外国人たちと手を組んだ
数僅かな連中
キオイやジュゲレスたちが
ずーっと懐に収めてきたんだ。

第二幕二場、キオイの家。豪華な家具の家で、仕事仲間が、計画中の殺虫剤工場についてキオイと話しこんでいる。手を組む外国人が今すぐ仕事を始めたいと言っていること、悪臭を放つので大物のいない土地、例えばキグーンダの持っている土地などが必要なこと、相手が欲しがっているのはアフリカ人の名前だけで、自分たちアフリカ人は番人の役目をすればいいんだというようなことを説明するが、キオイは、モン

バサなどでヨーロッパ人目当てにホテルをやる方が儲けがいいと反論して、工場建設には乗り気ではない。

やがて、仕事仲間と入れ替わりに、キグーンダ夫妻が訪ねてくる。二人は、教会での結婚式の費用を借りに来たという。キオイは、土地を売るか、土地を担保に自分が理事をしている銀行から金を借りるかの二者択一を迫る。

第三幕一場、キグーンダの家。教会での結婚式を夢想するキグーンダと妻。ムフーンニに捨てられたと泣きながら戻ってきた娘に現実に戻される。妊娠を告げて、売女呼ばわりされた娘のかたきをうちにと決意を固めたキグーンダは、剣を取ってキオイの家に出かけてゆく。

第三幕二場、キオイの家。キオイの家に乗りにこんだものの、躰けも出来ないで子供を売女にしてしまうような親を守ってくれるような法などないわと罵られたキグーンダは、逆上して剣を抜く。挙げ句は、一命こそ取り留めたものの、キオイの妻の放った弾に倒れてしまう。

第三幕三場、キグーンダの家。およそ二週間のち。土地は競買にかけられてキオイのものとなってしまった。あれ以来酒浸りの日々を送るキグーンダと語り合う妻に、ギカーンバ夫妻が諭す。背負う荷物がいくら重くても仲間うちで喧嘩したり、お互いに暴力をふるうのはよしましよ、敵がのんびりと躰をかいているというのに、家庭を壊すなんて、と。そして、ひとりでは力が足りなくても、二人なら蜂の巣を運ぶことが出来る、一本の指ではしらみは殺せないが、手が多くなれば仕事も軽くなるというギクユの諺を引いて、団結すればやがては展けてゆく、団結こそが私たちの力であり、財産であると、みんなで声をあわせて高らかに歌う。

ケニヤッタの死去により、理由を明かされないままグギは釈放されますが、ナイロビ大学への復職は認められませんでした。依然として体制の脅威だったからです。82年に英語版『悪魔を磔刑に』の刊行のためにロンドンを訪れたグギは、祖国に戻らず、亡命の道を選びました。

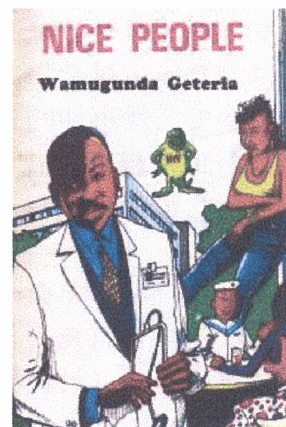
拘禁されてから、すでに30年、独立から40年以上の歳月が流れました。英国、米国、日本をはじめとする外国資本と手を携えた少数のアフリカ人は、その体制を守り続けています。グギさんが祖国に帰れなくなっても、少数派のモイとその取り巻きが、外国資本と手を組み、多数派である農民と労働者から搾り取り続けていたわけです。モイ政権下で副大統領であったキバキが政権を担っていますが、多数派の農民と労働者が搾取され続けるという基本的な構図は変わっていません。

3. 『ナイス・ピープル』

『ナイス・ピープル』は、多数派の農民と労働者ではなく、少数派の金持ち層に焦点があてられています。

ヨーロッパからの入植者はアフリカ人から土地を奪って課税し、大量の「出稼ぎ労

働者」を生み出しましたが、ケニアも南アフリカからの白人入植者がアフリカ人労働者を基に搾取機構を打ち立てた国です。激しい闘争の末に独立は果たしたものの安価な出稼ぎ労働者を基盤とする搾取の基本構造は変わらず、大統領となったケニヤッタもモイも、先進国と組んで体制維持をはかってきました。少数の金持ちと大多数の貧乏人という歪な世界で、日本はよき貿易のパートナーです。



エイズはそんな歴史にはお構いなしで、ウィルスは金持ちにも貧乏人にも感染します。『ナイス・ピープル』は少数の金持ちの側の実態を描いたもので、3つの点で意義深い小説です。

1つ目は、エイズ患者が出始めたころの混乱した社会状況が描かれている点で、文学という切り口で書かれた貴重な歴史記録でもあります。

2つ目は医者を含めた少数の金持ちに焦点が当てられている点です。『最後の疫病』のように虐げられた側に焦点を当てた小説は少なくありませんが、支配層に焦点が当てられたものは珍しく、その点でも貴重です。

3つ目は、主人公の医者の目を通して小説が描かれている点です。

「1884年：謎の疾病」

主人公ジョセフ・ムングチ (Joseph Munguti) は、ナイジェリアのイバダン大学の医学部を1974年の6月に卒業したあと、直ちにケニア中央病院「Kenya Central Hospital (KCH)」で働き始めたという設定です。卒業論文のテーマに性感染症を選んだこともあって、先輩医師ギチンガ (Waweru Gichinnga) の指導を受けながら、ギチンガ個人が経営する診療所で稼ぎながら勤務医を続けます。ギチンガは国立病院では扱えないような不法な堕胎手術などで稼ぎを得ていたようで、やがては告発されて刑務所に送られてしまいます。10年後、ギチンガから譲り受けた診療所の看板に「性感染症専門医」と記して、ムングチは念願の売春婦などを相手にひとりで診療を続けます。

1984年12月、「ケニアでは指折りの性感染症専門医であり、診断を下せない性感染症はない」と自負するムングチの元に、年老いたコンボ (Kombo) と名乗る中国人がやってきます。「やあ、先生さんよ、わしは金持ちじゃよ。2万シリング持ってきた。わしのこの病気を治してくれる薬なら何でもいい、何とか探してくれんか」と言っ、大金を残して立ち去ります。

法外な大金に戸惑いを見せて一度は辞退するものの、格安の料金で社会の底辺層を相手に性病の治療を続けるムングチには、断る理由もなく、謎の病気の正体を突き止めることになりました。最初はトラコーマクラミジアにより生じる性病性リンパ肉芽腫かと思いましたが、どうも違うようです。その日から、ケニア中央研究所「the Kenya Medical Research Institute (KEMRI)」の図書館に入り浸り、2日目によく、同年12月にアメリカで発行された以下の症例報告に辿り着きます。

あらゆる抗生物質に耐性を持つ重い皮膚病の症状を呈し、生殖器に疱疹が散見される。下痢、咳を伴い、大抵のリンパ節が腫れる。極く普通にみられる病気と闘う抵抗力が体にはないので、患者は痩せ衰えて、やがては死に至る。病気を引き起こすウイルスが中央アフリカのミドリザルを襲うウイルスと類似しているため、ミドリザル病と呼ばれている。サンフランシスコの男性の同性愛者が数人、その病気にかかっている。(『ナイス・ピープル』、140 ページ)

老人の症状から判断して診断に確信を持たざるを得ませんでした。元同僚の意見を求めます。大学でも講義を持つケニア中央病院の2人の医師は、未知のウイルスによって感染する新しい性感染症の診断に間違いはなく、すでに同病院でも米国人2人、フィンランド人2人、ザイール（現コンゴ民主共和国）人2人が同じ症状で死亡しており、3人のケニア人の末期患者が隔離病棟にいる、と教えてくれました。

興奮気味の心を抑えながら、隔離病棟に出向いたムングチは、改めて死にかけている老人の症状を確かめます。

私は調べた結果と比較して患者を見てみたかった。目的を説明すると、看護婦は3人が眠っているガラス張りの部屋に連れて行ってくれた。私たちが怪訝そうに見つめる救いようのない3人を見つめながら、私は言いようのないわびしさを感じた。そのとき、その老人が目に入った。私の患者、コンボ氏に違いなかった。口から泡を吹き、背を屈め、ひどく苦しそうに繰り返して咳き込んでいた。濁った咳は明らかに両肺を穿っていた。老人には私が誰かは判らなかったが、隔離病棟の柵を離れながら、後ろめたいほろ苦しさを感じた。(『ナイス・ピープル』、141 ページ)

患者コンボ氏は、実は以前ムングチの診療所を訪ねてきたルオ人女性の鼻を折った張本人で、ナイロビ市の清掃業を一手に引き受ける大金持ちでした。ルオ人の女性は清掃会社の就職面接でコンボ氏から裸になって歩き回るように命令された時に抵抗したために暴力をふるわれたのですが、噂では、肛門性交嗜好家の異常な行動の犠牲者が他に何人もいたようです。ムングチは、コンボ氏の死に際の哀れな姿を思い浮かべながら、神が犠牲者たちに代わってコンボ氏の蛮行への鉄槌を下されたに違いないと結論づけました。

元同僚の医師 Dr GG (Gichua Gikere) は、「スリム病」と呼ばれるこの病気については既に知っており、唯一薬を提供出来るだろうと「ウィッチ・ドクター」と呼ばれる地方の療法師・呪術師を紹介してくれたのですが、実際の役に立ちそうにはありませんでした。

こうして、性感染症専門医ムングチのエイズとの闘いが始まるのです。

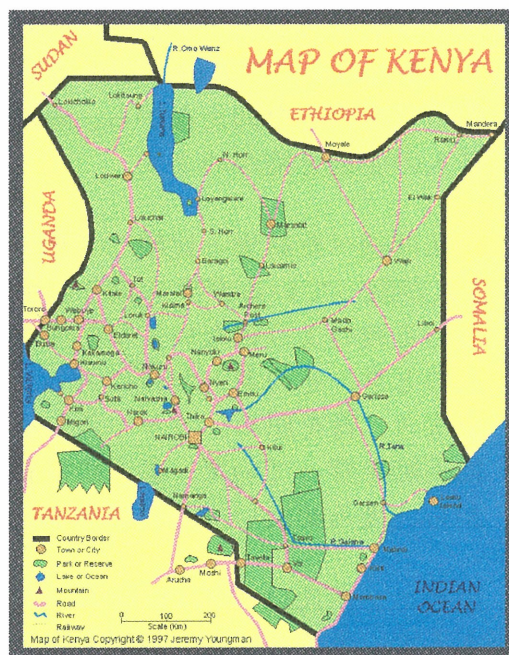
「ナイス・ピープル」

コンボ氏と同じように、医者やムングチも金持ちの階級に属しており、「ナイス・ピープル」とはそんな金持ち専用の次のような高級クラブに出入りする人たちのことです。

ムングチも、今では、役所や大銀行や政府系の企業の会員たちが資金を出し合う唯一の「ケニア銀行家クラブ」の会員だった。クラブには、ナイロビの著名人リストに載っている人たちが大抵、特に木曜日毎に集まって来る。テニスコート5面、スカッシュコート3面、サウナにきれいなプールも完備されており、ナイロビの若者官僚たちの特に便利な恋の待合い場所になっている。(『ナイス・ピープル』、146ページ)

「開発」や「援助」の名の下に、西洋資本と手を携えて大多数の人たちから搾り取る現代のアフリカ社会は、一握りの金持ちと大多数の貧乏人で構成されています。資本を貯め込める中産階級が極端に少なく、大抵はいつでも国外に追放できる外国人で政府はその階級を埋めています。

「ウイルスは金持ちにも貧乏人にも感染する」と書きましたが、実は、病気の治療を担う側の医者や官僚などの専門職の人たちも多数HIVに感染しており、その感染率の高さを作者は問題にしているのです。冒頭の「著者の覚え書き」からその深刻さが伝わって来ます。作者がオーストラリアに留学していた時に読んだ以下の新聞記事の一節です。



著者の覚え書き

『ナイス・ピープル』でどうしても書いておきたかった一つに1987年6月1日付けの「シドニー・モーニング・ヘラルド」の切り抜きがあります。3年のち、ここでその記事を再現してみましよう。

ハーデン・ブレイン著「アフリカのエイズ：未曾有の大惨事となった危機」

(ナイロビ発) 中央アフリカ、東アフリカでは人口の4分の1がHIVに感染している都市もあり、今や未曾有の大惨事と見なされています。

この致命的な病気は世界で最も貧しい大陸アフリカには特に厳しい脅威だと見られています。専門知識や技術を要する数の限られた専門家の間でもその病気が広がっていると思われるからです。

アフリカの保健機関の職員の間でも、アフリカ外の批評家たちの間でも、アフリ

かの何か国かはエイズの流行で、ある意味、「国そのものがなくなってしまう」のではないかとされています。

病気がますます広がって、既に深刻な専門職不足に更に拍車がかかり、このまま行けば、経済的に、政治的に、社会的にかならず混乱が起きることは誰もが認めています。

世界保健機構 (WHO) によれば、エイズは他のどの地域よりもアフリカに打撃を与えています。今年度の研究では、ある都市では、研究者が驚くべき割合と記述するような率でエイズが広がり続けているというデータが出ています。

第3世界のエイズのデータを分析しているロンドン拠点のペイノス研究所の所長ジョン・ティンカー氏は、「死という意味で言えば、アフリカのエイズ流行病は2年前のアフリカの飢饉と同じくらい深刻でしょう。

しかし、飢饉は比較的短期間の問題です。エイズは毎年、毎年続きます。」基本的に同性愛者間の触れ合いや静脈注射の回し打ちや輸血を通してエイズが広がってきた世界の多くの国とは違って、アフリカでは主に異性間の触れ合いを通して病気が広がっています。

70年代後半から80年代前半にかけてアフリカで病気が始まって以来、男性も女性も数の上では同じ割合で病気にかかっています。

アフリカでは性感染症を治療しないままにしている割合が高く、その割合の高さがエイズの広がり大きな要因になっている可能性が高いと多くの研究者が主張しています。

WHOのエイズ特別企画の責任者ジョナサン・マン氏は、一人当たり平均約1.75米ドル(2.40オーストラリアドル)しか医療費を使わないアフリカ諸国の保健機関にてこ入れをし、教育への直接の国際支援と血液検査を行えば、病気の広がりを抑えることが出来ると発言しています。(『ナイス・ピープル』、VII~VIIIページ)

幼馴染みのメアリ・ンデュク (Mary Nduku) の愛人イアン・ブラウン (Ian Brown) も Dr GG の娘ムンビ (Mumbi) の愛人ブラックマン (Blackmann) も、ムングチが高級クラブで出会った「ナイス・ピープル」です。

南アフリカからの入植者を祖父に持つブラウンは、高級住宅街に住む34歳の青年で、ジャガーを乗り回し、一流のゴルフ場でゴルフを楽しみます。勤務する大手の「スタンダード銀行」で秘書をしているンデュクと愛人関係にあります。エイズを発症し、英国で治療を受けるために帰国しようとするのですが、航空会社から搭乗を拒否されて失意のなかで死んでゆきます。

ブラックマンはモンバサの売春宿でムンビと出会い、常連客の一人となったフィンランド人の船長で、結果的には、2人の間に出来た子供を連れてヘルシンキまで押しつけてきたムンビを引き取ることになる。エイズに斃れたムンビの亡骸は、ケニアに送り返される。

高級住宅街に住むマインバ夫妻も「ナイス・ピープル」である。妻のユーニス・マインバは、ある日、額から夥しい血を流しながら病院に担ぎ込まれます。その傷が夫

の暴力によるもので、のちに、夫とメイドとの浮気の現場を見て以来、精神的に不安定な症状が続いていることが判り、精神科の治療を受けるようになります。数ヶ月後、コンボ氏と同じように肛門性交を好む夫が、かかりつけの医者から HIV 感染の疑いがあるので血液検査を薦められていると、ムングチに訴えにやって来ました。

性感染症専門医と性

HIV は血液と精液によって感染するわけですから、治療に比べれば予防は簡単だと思われがちですが、現実にはそうは行きません。性感染症専門医ムングチの診療と日常生活が、性感染症の恐ろしさと感染対策の難しさに加えて、複数婚が続くケニア社会と今の日本社会との、性や売春行為に対する社会通念の違いを教えてください。

ムングチは、メアリ・ンデュクとユーニス・マインバとムンビと、同時に関係を持つ。幼馴染みのメアリ・ンデュクとは高級クラブで再会し、イアン・ブラウンの愛人であることを承知で関係を持ち、一時は同居しています。アパートで鉢合わせになったブラウンとは、大げんかをして別れています。ブラウンはエイズを発症して死んで行きます。

ユーニス・マインバはムングチが担当した患者です。性的な関係を持つようになり、中年マダムのお供をして週末毎に豪華な小旅行に出かけた時期もあります。夫が HIV に感染した可能性が高いと相談され、恐ろしくなるとムングチはマインバと別れました。

ムンビとは父親を訪ねて来たときに私設の診療所で出会ったのですが、モンバサで娼婦をしているのを承知でムングチは恋人関係になりました。一時期同棲をして、子供を身ごもったことを告げられたとき、結婚を決意します。ムングチの働いていたホスピスでムンビは出産するのですが、生まれてきた子供はムングチの子供ではなく、売春宿の常連客ブラックマンの子供でした。ムンビは逃げるようにヘルシンキへ渡りますが、エイズを発症して死んでしまいます。

ムングチは、のちにエイズで死ぬ愛人を持つメアリ・ンデュクと、HIV に感染したと思われる夫を持つユーニス・マインバと、異国の地でエイズを発症して死んだムンビの3人と同時に性的な関係を持っていたことになります。

ムングチは、売春行為を社会の必要悪と捉え、性感染症については治療を優先すべきで、社会の底辺層には国が無料で治療活動を行なう義務があるという趣旨の卒業論文を書きました。私設の診療所では、最低限の料金でその人たちの性感染症の治療に専念しました。性感染症の怖さを十分に承知していたわけで、ムングチをはじめとする「ナイス・ピープル」の性や売春に対する考え方を思い合わせれば、この小説の冒頭に載せられた「アフリカの何か国かはエイズの流行で、ある意味、『国そのものがなくなってしまう』のではないか」という記事が、真実味を帯びて来ます。

南アフリカからの入植者によって侵略されたケニア社会は、かつての自給自足の豊かな農村社会ではありません。複数婚は、乳児死亡率の高い中で子孫を確保したり、農作業や老人・子供の世話を担当する労働力を確保する、などの必要性から生み出さ

れたものでしょう。西洋社会が批判する割礼にしても共同体全体で次世代を育てる教育制度の大切な一環でした。しかし、土地を奪われ、無産者にされて課税される農民や、都市部で働かされる出稼ぎの賃金労働者に、旧来の制度を踏襲し発展させる力はありません。割礼や複数婚の制度が残っていても、かつての共同体を基盤にして機能していた制度とは全くの別物なのです。

大多数の農民や労働者は食うや食わずの生活を強いられ、国全体も、西洋資本と手を組む一握りの貴族やその取り巻きの豊かさと引き替えに、背負いきれないほどの累積債務に喘いでいます。そこに HIV が出現し、猛威をふるい始めたわけです。2003年の推計では、ケニア全体の平均寿命は 45.22 歳にまで落ち込んでいます。